

青島日本人学校における現地理解教育

前青島日本人学校 教諭

北海道苫小牧市立日新小学校 教諭 梅田 紘里子

キーワード 在外教育施設、青島、現地理解教育、国際理解教育

赴任校の概要（2024年7月20日現在）

学校名・日本語：青島日本人学校

学校名・現地表記：青島日本人学校

URL：<http://www.qingdaoj.org>

1 はじめに

私が赴任した青島日本人学校は、社会主義共和国の中国にある。中国は、言語・文化・政治等、日本とは異なる面が多々ある。青島日本人学校に在学する児童生徒たちは、言語・文化・現地校交流などの現地理解教育を通じて日本と中国の国の相違を直接体験し、学び合うことができていた。児童生徒が双方の国々のよさに気付き、交流前の考え方から変容していく様子を紹介したい。

2 青島日本人学校における国際理解教育の取り組みの実際

(1) 総合的な学習の時間「中国文化」

青島日本人学校では、総合的な学習の時間の中に「中国文化」を位置づけている。小学部1・2年生で1クラス、小学部3・4年生で2クラス、小学部5・6年生で1クラス、中学部で1クラスの計4クラスを週1回行っている。メインティーチャーを中国人の先生が行い、サブティーチャーを本校職員が行っている。中学年3・4年生と中学部のクラスは、きめ細かく指導するためにレベル分けをし、児童生徒の実態に合うように工夫している。

低学年のクラスでは、ゲームやクイズを通して中国語に触れ合う機会を増やし、高学年のグループでは、話す学習や書く活動にも力を入れている。また、毎年「水餃子づくり」や「中国将棋」「沙布づくり」を行い、積極的に中国の文化に児童生徒が触れる機会を設けている。

(2) 現地小学校との交流（小学部）

2021年と2022年は、コロナウィルスのためにオンラインのみの交流だったが、2023年には、現地校の児童たちが来校し、直接交流をすることができた。現地校からは、小学生約60名が青島日本人学校へ来て、青島日本人学校の小学部と一緒に授業を行い、触れ合うことができた。

全体交流では、小学部5・6年の児童が司会やゲームを考え、実施した。一緒に日本の伝統的な遊びの一つ「だるまさんが転んだ」に挑戦したり、合唱や太鼓演奏を聞き合ったりした。各学年との交流では、「ぶんぶんゴマづくり」や「ハンカチ落とし」を行い、子どもたちは、現地校の児童へ習った中国語を使って、伝わるように工夫していた。

交流後の児童たちは、「中国語で話が通じたときが、とても嬉しかった。」「現地校の友たちが喜んでくれ

たので嬉しかった。」「中国語を使わなくても、表情やジェスチャーでなんとなくわかった。」「これからも交流を続けたい。」など振り返り、貴重な体験をすることができた。

(3) 現地中学校との交流（中学部）

2023年に現地校の中学校と交流を行った。現地校からは、中学生が青島日本人学校へ来校し、青島日本人学校の中学校部と互いの学校生活や日常生活を伝え合い、スポーツを通して交流を図った。

現地校と本校の交流時に英語を使って交流し、本校生徒の英語の学習へのモチベーションにもつながった。

交流後の生徒たちは、「現地校の生徒は、完璧に英語を話していて、私もあんな風になりたいと思った。」「最後の方では、仲良くなって、最初よりも英語をよく話すことができた。」「中国と日本の学校の生徒同士の関係の違いを感じた。ゲームのルール説明や学校紹介のとき、話し方が原因で現地校の生徒に意味が伝わらなかったので、英語の発音の練習をしたり、紙に簡単にまとめたりした方がよかったと思った。」「中國の人たちは積極的で、自分も積極的に英語を話せばよかった。」と振り返り、現地校の生徒との比較を通して自分たちを見つめることができた。

(4) 現地の高校生や大学生との交流

2023年に現地大学に通っている大学生と地域で日本語を学んでいる高校生を招き、中学部と交流を行った。25名が日本人学校へ来校し、中学部生徒14名と「ことわざかるた」や「竹馬」をしたり、ワークショップを行ったりした。

特にワークショップでは、「日本のよいところを中国や海外に紹介するイベントを開催すると、どんな方法で、何を使って紹介すると効果的か」を模造紙に書いて発表した。お互い日本語と中国語でテーマに沿って話し合い、中国の学生の考え方につれることができた。

交流後の中学部生徒たちは、このような感想をもつことができた。

（生徒の振り返りより抜粋）

- ・日本語と中国語という全く違う言語で、覚えるのもとても難しいとされている日本語を学ぼうとして、たくさん人前に出て発表したり、いろいろなことにチャレンジしてくれたりした方もいた。私は言葉を覚えているか覚えていないかでコミュニケーションの深さが全く違って来ると思う。だから、「言葉」はとても重要だと思った。

- ・青島大学の方の日本語がとても上手だった。

- ・外国語を実際に使うことで、学びの「やりがい」や「楽しさ」を実感できた。

- ・私が1番交流会で思ったことは、日本語は1つの言葉でもたくさんの言い回しや他の単語があるから、



日本の伝統音楽「和太鼓」を披露した様子



「ワークショップ」の様子

1番わかりやすい言葉を選ぶと青島大学生のみなさんに伝わり、とても嬉しかったです。そして、学霸（頭のいい子、勉強家）という中国語を教えてもらいました。

- 語学学習は難しい。日本語の場合は文法や漢字、カタカナなどの多くの文字、中国語の場合は発音や語順。しかし、中国語と日本語には共通点もある。難しいが、面白いとも感じた。
- 普通に日本人の人と話をしていると、よく伝わったり、たまに伝わらなかつたりするけれど、外国の方（中国の方）だと、丁寧な日本語に直さないと伝わらないということがわかりました。次の交流会でもまた、日本語を専攻している方と交流ができる機会があれば、相手に合わせて話すことを反省点にしたいです。
- 中国から伝わってきた漢字をもとに日本の3種の文字が生まれたこともあるため、日々漢字に触れている中国人の皆さんにとって、日本の漢字を覚えることは簡単なのではないかとばかり思っていたけれど、今回の交流を通して中国の方も日本語を勉強する際、日本の漢字を覚えることに苦戦しているということを知り、驚きました。
- 今回の交流で、日本語について青島大学の学生の方々と話す機会があり、その中で日本語のひらがなが好きなこと、また別のグループでは日本語の中で漢字が難しいことを話してくれた。中国も漢字を使っているため漢字がわかりやすいと思っていたが、日本特有の訓読みの読み方や複数の読み方・意味があるのを考えると納得できた。
- 漢字は中国から日本に伝わったけど、今、日本語を学ぶ中国人の学生にとって、日本の漢字は習う中で一番難しいと感じていることを知りました。また、これは、中国で昔使われていた漢字を日本では今も使っているからだと思います。

③ おわりに

青島日本人学校では、長年中国文化や現地校交流などをカリキュラムに位置づけてきた。しかし、2021年、2022年の世界的なコロナウィルス感染症の大流行のために、現地校との交流を控えざるを得なかった。その後、2023年から本格的に交流を再開し、中国語や英語、そして日本語を通じて現地校の児童生徒と直接触れ合うことができ、改めて児童生徒にとって現地校との交流は、大きな学びになると感じた。そのことは、彼らの振り返りや交流後の表情から読み取ることができる。

今後も現地校教育のプログラムを学校のカリキュラムにしっかりと位置づけ、継続して交流活動をしていきたい。その際、ただのイベントで終わるのではなく、各学年に応じた交流の仕方や振り返りの視点などを工夫し、より充実したものにしたい。例えば、小学部低学年は、「やって楽しかった」「おもしろかった」という記憶に残るような体験を意識し、小学部高学年以上は、現地校の児童生徒と自分を比べ、自分を客観視し、振り返りができるような働きかけをしていきたい。これらの交流を一過性のものにするのではなく、継続して続けることによって、交流体験から学んだ自分の足りないことやもっと学習してみたいことなどを意識し、普段の教科への意欲につなげることができると感じた。

児童生徒たちは、日本ではない中国・青島という土地で行われた現地理解教育によって、知識だけではない学びを得ることができたと考える。そして、私自身もそれを間近で学び感じることができた。近い将来、このように現地で直接学んだ体験をした子どもたちが、多様な考え方を受け入れながら、主体的に様々な国の人々と関わることができるようになってほしいと期待している。